

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

13 日 14:40～16:05 特別講演

「小学校からの英語教育をどうするか―「引用ゲーム」の限界を自覚する―」

講師 柳瀬 陽介（広島大学）

岩波ブックレット『小学校からの英語教育をどうするか』の主要なメッセージの一つは、小学校にこれまでの中学・高校の英語教育を押し付けるのではなく、小学校の実践からわかり始めたことを活かして中学・高校の英語教育を変えてゆくべきだ、というものです。

今回の講演では、これまでの中学・高校の英語教育の大半が「引用ゲーム」に過ぎないという同書の批判的主張を特に取り上げ、「引用ゲーム」とは何かを確認したうえで、なぜそれでは「言語」と「コミュニケーション」が成立しないのかを、それぞれ、ダマシオの身体論とルーマンの自己参照の議論を援用しながら説明します。そうして「引用ゲーム」の限界を自覚した上で、それをどう克服してゆくかについての大きな道筋を示します。

講演だけでも理解できるようにお話するつもりですが、ページ数の都合で同書では展開できなかった議論を導入しますので、可能ならば同書を予めお読みいただければ当日の理解が進むかとも思います。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

13 日 13:00～14:25 企画ワークショップ

第 1 室

「英語教育における小中高の接続と連携：京都教育大学附属校の取組」

今西 竜也（京都教育大学附属京都小中学校）

山川 拓（京都教育大学附属桃山小学校）

黒川 愛子（京都教育大学附属桃山中学校）

磯部 達彦（京都教育大学附属高等学校）

泉 恵美子（京都教育大学）（コーディネーター）

1999 年より小 1 から必修教科として英語を実施し、2009 年に文部科学省「英語教育改善のための調査研究」の指定を受け、小中一貫 9 年間のカリキュラムを作成し進めてきた京都教育大学附属京都小中学校、並びに 2014 年度より文部科学省の「英語教育強化地域拠点校事業」に指定された附属桃山小学校・中学校・附属高等学校の取組と研究成果の一部を紹介する。

京都小中学校では、カリキュラムにおいてスパイラルかつ身体、情動に焦点を置きつつ、小中ギャップをなくすため中等部（5 年～7 年）での指導に重点を置いている、また、昨年度よりモジュール学習を開始し、CAN-DO リストの作成と小中一貫カリキュラムの見直しにも取り組み始めており、小中の接続を中心に紹介する。

桃山小学校では、小・中学生が合同で授業を行う「交流学习」を中心に連携プログラムの作成を行ってきているが、学習指導要領改訂に向けた教育課程編成（1・2 年週 1 回、3・4 年週 2 回の英語活動、5・6 年週 2 回の教科英語）、および授業内容の改善に取り組んでおり、学習到達目標の設定や CAN-DO リストを使った児童の内省の見取りなども紹介する。

桃山中学校では、小中連携の視点から多様な視聴覚教材・音声教材によるインプットや、様々な Activity や Presentation を活用する授業を工夫しており、高等学校との接続を意識した新しい年間指導計画と CAN-DO リストの作成を行った。英語教育高度化を目指した 1 年の TPR とラウンド制の併用や 2・3 年の 4 技能の工夫に向けた取組について紹介する。

高等学校では、中 3 と高 1 の英語力ギャップを埋めるために、入学前課題を実施してきたが、さらなるスムーズな移行のために、中・高英語カリキュラムの連結を模索した取組を行っている。その中で、自分の考えや意見が英語で主張できるような場面設定、2 年文系対象にグローバルな課題について学ぶ選択授業の新設、英語多読図書貸し出しシステムの確立、小中高接続を意識した CAN-DO リスト、海外英語研修実施準備等について紹介する。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

13 日 13:00～14:25 企画ワークショップ

第 2 室

「高校英語教科書の分析から語用論的指導の可能性を探る」

水島 梨紗（札幌学院大学）

文部科学省の学習指導要領が示すように、中高の外国語教育においてコミュニケーション能力の育成が主要な目標として掲げられ、言語の機能が重視されるようになって久しい。Bachman & Palmer (1996, 2010) が論じるように、言語の働きの適切な理解や産出には「語用論的知識」が関わっているとされるが、現在の英語教育において、語用論的指導のための環境はどの程度整えられているのだろうか。

この点を探るための一助として、本研究では現行の高校英語教科書（「英語表現Ⅰ」）8冊を対象に、発話（文）の機能やコンテキスト、相互行為性といった複数の語用論的観点から分析と評価を行った。

本講演では、語用論的指導の可能性に関し、分析から浮かび上がってきた問題点を明らかにした上で、改善に向けた具体的な提言を行っていく。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

13 日 16:20～17:45 イブニングセミナー

第 1 室

「言語テストとスタンダードセッティング」

中村 洋一（清泉女学院短期大学）

清水 裕子（立命館大学）



最近, いろいろな場面で Can Do List や到達目標の設定の話題がでてきています。英語で何ができるか（行動）を記述し, それがどの程度できるようになれば「到達した」と言えるのか (Cut Score) を設定すること, つまりスタンダードセッティングが重要になってきます。

では, 到達目標をどのように設定し, どう測ればいいのでしょうか。そこには学習者のニーズや, 指導者側や組織の「思い」や「希望」なども絡んでくるかもしれません。到達目標と様々な標準テストとの関連づけがされている場合は, 数値情報でより客観的に捉えられ, 到達目標の精度が高くなると感じるかもしれません。



このセミナーでは, 言語テストの基本的な考え方について紹介し, 21 世紀型スキルと英語教育との関連にも触れながら, スタンダードセッティングに必要な＜発想の転換＞を試みたく思います。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

13 日 16:20～17:45 イブニングセミナー

第 2 室

「外国語能力を支える脳内メカニズム」

尾島 司郎（滋賀大学）

母語であれ外国語であれ，人間の言語能力は口や耳ではなく，脳に宿っている。英語教育とは，教室内外における教育活動を通して，学習者の脳を変化させる試みだと見做すことも出来る。従って，教育の観点から脳科学に興味を持ったり，教育関係者が脳機能を計測したりすることは，ごく自然な流れである。



この講演では，外国語（第二言語）の学習や教育に関する様々なテーマについて，従来からの言語学や心理学の研究に加えて，最近の脳科学の研究も交えながら論じる。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

14 日 10:00～11:25 企画ワークショップ

第 1 室

「英語の反転授業でできること」

中西 洋介（近畿大学附属高等学校）



日本では一昨年から広く知られるようになった「反転授業」ですが、それを実践する教員はまだそれほど多くいないように思われます。反転授業という、「自宅ではタブレット端末で解説動画を視聴し、学校（教室）では協働学習をして復習や応用をする」というイメージを持たれている先生が多いようです。確かにこのイメージは間違っていないかもしれませんが、反転授業には協働学習以外の形態もあることを知ることが重要です。

今回の発表では、私が一昨年 4 月より実施している「反転授業で行う英語授業」を紹介いたします。反転授業により、日本語解説とオールイングリッシュの両立が時間的な制約を越えて可能になりますが、①どのような解説動画を生徒が視聴しているのか、②授業では解説の代わりに何を具体的にしているのか、③その目的とは何か、④反転授業を行う上での教師の役割とは何か、⑤反転授業のポイントとは何か、などについてお話する予定です。時間が許せば、反転授業の背後にある ICT 教育における英語教育の方向性について新たな視点を提供したいと考えています。

ICT を用いる「反転授業」は万能薬ではないにしても、生徒に与える影響は極めて大きいと考えられます。それだけに今までの手法とは異なる多様な可能性を秘めています。反転授業を行う上で大切なことは、各々が独自の反転授業を作りあげて生徒に少しでも役に立つ授業をすることです。今回の私の実践報告が、反転授業の具体的なイメージ作りにお役に立てば幸いです。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

14 日 11:35～13:00 ランチョン・セミナー

第 1 室

「言語処理の自動化を目指す音読・シャドーイングの
指導」

山内 豊（東京国際大学）



従来の我が国の外国語教育は、正確さにこだわり質的側面を重視してきたため、知識はあっても実際の場面で使えなかったり、即応できないことが問題になってきた。これらの反省から、近年では、量や速度を考慮した指導法にも注目が集まり、速読・多読や音読・シャドーイングなどがさまざまな外国語教育場面で使われるようになってきている。

学習者がさまざまな言語知識を試行錯誤しながら意識・努力して働かせる段階 (controlled processing stage) から、量や速度を重視した学習法や指導法を用いることによって、処理スピードが速まり、あまり意識しないでも言語を処理していける段階 (automatic processing stage) へ進んでいき、母語話者に近い処理ができるようになると期待される。このような言語処理の自動化は、語彙認識、文処理、談話処理においてどのようなプロセスをとるものであり、学習者が現在どの発達段階にあるかをどのように測定・評価していくことができるのかなどについて、先行研究や講演者自身が行ってきた研究結果などに基づいて解説していきたい。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

14 日 11:35～13:00 ランチョン・セミナー

第 2 室

「英語教員のためのヴィゴツキー／バフチン理論入門」

西本 有逸（京都教育大学）



本セミナーを 2012 年 6 月 9 日の故山岡俊比古先生によりますランチョン・セミナーへの応答として、先生への敬愛を込めて執り行わせていただきます。

ザクースキ：ロシア料理の前菜は色とりどりである。ことばとは何か，どこから来たのか等考えてみたい。

スープ： ヴィゴツキー理論はボルシチのようにさまざまな理論が溶け込んでいる。

肉料理： バフチン理論はシャシリク（肉の串焼き）のように素朴である。生きる勇気が湧いてくる。

サラダ料理：英語教育への応用はサクサクッとは決していない。ロシアのサラダには和えるというコンセプトがあるが，認識論と存在論とを和えてみたい。

デザート： 英語教育にことば・人格・自由を取り戻すために。

飲み物： ウオッカは出ません。各自，飲み物をご用意下さいませ。

参会のみなさまが食中毒をおこさないように一所懸命に努めます。

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会 プログラム概要

14 日 14:45～16:15 シンポジウム

「確かな日本の英語教育改革をめざして」

モデレータ・講師 横川 博一（神戸大学）

講師 吉富 朝子（東京外国語大学）

講師 溝畑 保之（大阪府立鳳高等学校）



ここのところ英語教育を取り巻く状況が大変騒々しくなっています。入試改革、グローバル人材育成、小学校英語の教科化、それに合わせてアクティブラーニング、反転授業など、教育のパラダイムの変化の波も英語教育とは無縁ではありません。そのような、ある意味、時代の転換の只中であって、不確実で混沌とした状況から、英語教育において不変のものと意味のある確かな変化の方向を探ってみたいと思います。

吉富朝子先生には、第二言語習得研究の成果も踏まえ、多言語多文化共生社会といった視点などに立脚して、日本の英語教育の方向性についてお話しいただく予定です。第二言語と外国語の違い、日本という文脈で何を目指すべきなのか、世界の外国語教育の中で日本の英語教育はどう変わっていくべきなのか、そんなことが垣間見えるといいなと思っています。

溝畑保之先生は、大阪府高英研を中心に指導的な役割を果たされておられますが、入試改革の必要性とその具体的方針、高校英語授業の改革の必要性とその具体的方策など、実践ベースでオピニオンを発信されておられます。高校を中心に、どのような改革が本当に必要なのか、改革すべきは何か、などについて具体的にお話いただきます。

最後に、横川は、今よりももう少し英語運用能力を向上させること、それを科学的根拠に基づいて、応用可能性のあるできるだけシンプルな形の指導モデルを構築することによって、多くの問題を解決することができると考えています。そんな視点に立って、英語学習者の言語処理に関するデータや実証研究も援用しながら、効率的に英語運用能力を伸ばす方法論について考えてみたいと思います。

（文責：横川博一）